

タローはびよびよと

福間明子

秋田犬のタローは

朝四時には吠える

雨の日もタローはびよびよと

風の日もタローはびよびよと

吠えては父を呼ぶのであった

散歩に出かけるのは父の日課だった

この日課は十一年間続いたことになる

物語の犬はいろいろ聞いたことがあるけれど

犬との関係も盟友といえるのだろうか

「ただいまや 過去聖霊は蓮台の上にて

ひよと吠え給ふらん」

平安時代の『大鏡』に播磨の国の僧侶が

愛犬家の犬の法事にての説法の話

千二百年前にも畜生の法事をしていたとは

仏教の教えであろうか

タローは盂蘭盆の十五日に

帰省していた家族全員に看取られて身罷った

「散歩しましょうと言いながら あの世で

姿を現すことを信じている」と 父は言った

その父も亡くなった

あの世でタローはびよびよと

吠えては父を呼んでいることだろうか

*平安時代の書物には犬の鳴き声は

「ひよ」または「びよ」と記されている